

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 現代心理学 研究科 映像身体学 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻 博士後期課程4年	河野 真理江 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部・映像身体学科・教授	中村 秀之 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題	日本映画におけるメロドラマの研究——昭和30年代における三つのサブジャンルを中心に		
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程4年	河野真理江	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 199,417 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1950年代から1960年代の日本映画において、「メロドラマ」と呼ばれるジャンルがどのような展開を辿ったかを、歴史的に検証した。とりわけ、「すれ違い映画」、「文芸メロドラマ」、「リバイバル・メロドラマ」という三つのサブジャンルを中心に、これらのカテゴリーに属する映画群が、産業的・批評的にどのような意義を持っていたかを考察した。また、それぞれのジャンルの中から、とくに範例的な性質を持つ作品を一つずつ取り上げて、テキスト分析を行うことで、顕著な映画的達成や、表象と歴史的コンテクストとの関係、観客に対するアプローチ等を明らかにした。この結果、本研究は、日本映画の「メロドラマ」の変遷を実証的に整理するばかりでなく、美学的・表象文化的側面から、このジャンルを再評価することにかんして一定の成果を上げることができた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[日本映画] [メロドラマ] [映画ジャンル]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究が対象とする三つのジャンルのうち、「すれ違い映画」及び「リバイバル・メロドラマ」にかんして、研究成果をとりまとめ、学術論文と研究会での口頭発表というかたちで報告の機会を得た。なお、「文芸メロドラマ」にかんする研究については、2012年度における SFR プロジェクト研究採用時に、既に二つの学術論文を通じて成果が挙げている。したがって、今年度の当該 SFR 研究は相当に充実した内容で完了に至ったと言える。以下、「すれ違い映画」及び「リバイバル・メロドラマ」の研究についての経過と成果についてそれぞれ詳述する。

【「すれ違い映画」の研究】

① ジャンルの概要にかんして

1953年の松竹映画『君の名は』の大ヒットにより、日本映画界では、この映画と類似の内容を持つ恋愛映画が、1960年代半ばまで量産された。このような映画は、同時代の言説のなかで、しばしば「すれ違い映画」と呼称され、日本におけるメロドラマ映画のメインストリームとみなされていた。本研究では、この「すれ違い映画」というジャンルの特質を、その成立と受容のプロセスや、産業・表象上の植民地主義的な政治力学、同時代における芸術と階級めぐる議論との関連といった視点から考察した。

その結果、このジャンル映画にかんして次のような傾向が顕著に認められることが明らかになった。すなわち、(1)この映画群は、日本各地、時には日本と海外で引き裂かれた恋人たちの、誤解や不運な偶然に妨げられる困難な恋の行方を描く。(2)しばしば物語は長大で、それゆえ連続作品として構成される傾向があり、同名の大衆小説やラジオドラマ、テレビドラマを原作に採り、映画は同名の主題歌を伴って公開される。(3)同時代の言説上では、非常に通俗的で、かつ芸術的にはほぼ反価値的な性格を持つ作品群と認識されたが、大衆文化と階級をめぐる興味深い議論も引き出した。

本研究におけるとくに重要な論点は、「すれ違い映画」における「すれ違い」という言葉が何を意味していたかということにあった。この言葉は、通常、「出会い損なうこと」を指して用いられることが多いが、これらの映画においては、むしろ登場人物どうしの感情面での齟齬(誤解や早とちり、認識不足、取り返しのつかない誤った選択など)や、波瀾に満ちた運命、不条理な物事の成り行きといったものを意味していると考えたほうが、より適切である。この「すれ違い」は、待つことを知らない交通機関の進行や地理的な距離の隔たりへと悉く還元するプロット上の仕掛け、ないし論理と言い換えることもできる。「すれ違い映画」における「すれ違い」のほぼすべては、日本を横断して起こり、さらには外国にまでその範囲を拡げていった。本研究は、この「すれ違い映画」の舞台の拡張現象に着目し、「すれ違い」が、単に物語上の要請を超えて、日本の映画産業の輸出政策と連動し、さらには当時の大衆の帝国と植民地へのノスタルジックな記憶と結びついていたことを明らかにした。上記の内容を詳述した学術論文を、『映画学』で発表した。

② ケース・スタディー：『君の名は』三部作(1953～1954年)について

本研究では、「すれ違い映画」の範例的特質を明らかにするために、ケース・スタディーとして『君の名は』を取り上げ、作品分析を行った。この作品は、公開当時、「感傷的すぎる」という理由で、しばしば「通俗的」とのレッテルを貼られ、厳しい批評的非難にさらされた。いっぽうで、多くの一般の観客を魅了したことで知られる。そこで、本研究では、この作品の感傷性を生み出すメロドラマ的葛藤の所在と特質を、テキストの様々な局面で主題化される「すれ違い」の過程と観客性との関係から読み解くことを試みた。

その結果、明らかになったのは、『君の名は』においては、感傷性を生み出すと考えられるメロドラマ的葛藤は、善と悪のような明確な二項対立としてではなく、宙吊り、マゾヒズム、パラドクスというようなつねに倒錯的な撞着から、「過剰」として生み出されるということであった。このような倒錯的な葛藤の状態に対する感傷性の可能性は、いっぽうでは『君の名は』公開当時の世相、とりわけこの時代に特有の大衆のメンタリティーと関与している。

研究成果の概要 つづき

そこで本研究は、敗戦後に日本人が集団的に経験したとされる「虚脱」というメンタリティーに注目し、これと『君の名は』の倒錯的なメロドラマ的想像力との関連性とを論じた。すなわち、敗戦後のイデオロギー的及び道徳的価値観の決定的な顛倒から生じた「虚脱」は、おそらく『君の名は』という作品に対しては、そのメロドラマ的想像力を生み出すに十分な壤土を提供したと考えられるのである。

結論としては、『君の名は』の強烈な感傷性は、安易な共感や同一化の可能性に託されているというよりは、むしろこの映画が、物語世界に内在化された観客性と実際の観客が属す現実世界、イメージと語りの構造、観客性と歴史の時間とを、悉くすれ違わせてしまうことの結果として捉えることができるものである。

上記の内容は、「日本映像学会東部支部 2014 年度第一回映像テキスト研究会」及び「第 40 回日本映像学会全国大会」で口頭発表した。

【「リバイバル・メロドラマ」の研究】**① ジャンルの概要にかんして**

「リバイバル・メロドラマ」は、1954 年頃から 1960 年代後半にかけて、日本映画界で量産された再映画化によるメロドラマの作品群を指す。これらの映画は、同時代において必ずしも「すれ違い映画」のような、統一的な呼称を持たなかったが、日本映画が二本立て興行を前提とする量産制の時代へと突入していくなかで、ジャンル・カテゴリーとしてのまとまりを持つようになった。研究の結果、このジャンルについては次のような共通の傾向が認められた。すなわち、(1) 戦前期、とくに 1920 年代と 1930 年代の「メロドラマ」及び「新派悲劇」と呼ばれていた作品群の再映画化を中心とする。(2) 『君の名は』の大ヒットにともなう「メロドラマ」映画の需要の高まり、及び二本立て興行のための安定的な企画の必要性という二つの産業的要請から、ジャンルの制度化がすすめられた。(3) このジャンルの成立と製作にかかる経過は、映画産業におけるメロドラマ・コンテンツの飽和状態とテレビ受像機の普及にともなう映画業界全体の斜陽化を背景としている。(4) このジャンルに属する作品は、「すれ違い」や「文芸メロドラマ」のように題材や内容に強い魅力を持っていたというよりは、海外輸出向けに装飾された「日本趣味」や、メロドラマ的なプロットの戯画化、特定のスターにかんするゴシップに作品ないし商品としての価値を持っていた。

② ケース・スタディー：『続・愛染かつら』(1962 年) について

「リバイバル・メロドラマ」の範例的特質を明らかにするためのケース・スタディーとして『続・愛染かつら』を扱い、テキスト分析を行った。「メロドラマ」と呼ばれる数々の映画が量産された 1950 年代後半を通じて、このジャンルの発達は飽和状態へと達し、1960 年代前半には、新奇な趣向というものはほとんどみられなくなった。『続・愛染かつら』は、「リバイバル」という映画ジャンルが終焉へと向かうそのような時代に、オリジナルの物語内容を踏襲しつつ、バックステージ・メロドラマの体裁を取ることで、スターダムの虚と実といったより現代的で、かつ当時「メロドラマ」というジャンルを取り巻いていた現実的な問題を主題化した。このことにより、本作は、自己言及的なりメイクないしメロドラマについてのメロドラマという特異な性格を持った映画になっている。

①②の内容は、国際日本文化研究センターでの協同研究会（「昭和戦後期における日本映画の再構築」）で口頭発表した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

河野真理江、「『君の名は』と戦後日本の「すれ違い映画」、『映画学』、28号、2015年、36-55頁。

② 該当なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

(1)河野真理江、「『君の名は』論——「すれ違い」メロドラマの通俗性とマゾヒズムについて」日本映像学会東部支部 2014年度第一回映像テキスト研究会、立教大学池袋キャンパス、2014年4月12日

(2)河野真理江、「リバイバルもの——リメイク、アダプテーション、「看護婦」」国際日本文化研究センター共同研究会 (昭和戦後期における日本映画史の再構築)、国際日本文化研究センター、2014年8月31日

④ 学会発表

(1)河野真理江、「『君の名は』論——「すれ違い」メロドラマの通俗性とマゾヒズムについて」第40回日本映像学会全国大会、沖縄県立芸術大学、2014年6月7日